

～ひとりで悩まず話してみませんか～



北海道いのちの電話

24時間：011-231-4343

ナビダイヤル：0570-783-556

フリーダイヤル
毎月10日
(午前8時～翌日8時)

0120-738-556

ファックス相談
(聴覚・言語に障がいのある方)

011-219-3144

「自殺予防を願って」

理解と支援、もっと広がれ

いのちの電話 13 センターの広報担当者が研修

第23回いのちの電話東日本広報担当者会議が10月9、10両日、札幌市教育文化会館で開かれました。東日本の都道県で活動している13の「いのちの電話」で広報誌の制作に当たっている26人が参加しました。

今号はそのレポートです。各地の「いのちの電話」が何に悩み、どう行動しようとしているのかを汲み取っていただければ幸いです。

広報誌は地域の人たちに「いのちの電話」の存在と活動内容を知っていただくための大切なツールです。手に取って読んでもらえる広報誌をどう作るか、社会の理解と支援の輪をより広げるには、どのような内容にするかを研修するのが会議の狙いです。

第1日は「読み手に訴える広報誌の作り方」をテーマに講師の話聞き「わがセンター」の題で文章を書いてみました。(2面、3面で紹介します)

第2日は「広報誌に託す願い」のテーマでディスカッションしました。「編集者としてどんな思いで制作作業に当たっているか」「相談活動の問題点」などについてざっくばらんに話し合いました。

参加者が共通の課題として挙げたのは「人」と「資金」です。「相談員として活躍できる人を増やしたいが、現実には減少傾向にある。その状況の中で広報担当者のなり手もなく、年2回の発行作業に苦勞している」「どうしたら多くの相談に対応できる体制を作れるのか。そのために広報誌はどんな役割を果たせるのか。日々自らに問いかけ悩んでいる」などの発言がありました。

資金の確保も切実な問題で「支援者の高齢化で、個人の寄付が減っている」「広報誌のページを削り、カラー面を減らすなどで対応している」ところもありました。不足をカバーするため、企業に「チャリティーでコラボしましょう」と呼びかけたり、広告を募集したり、地元の落語家の協力で「チャリティー寄席」を開くなど、さまざまな工夫の報告がありました。

全国の「いのちの電話」は「なんとかしてでも悲しい自殺を防ぎたい」という共通の理念に燃えて、人材や資金の不足に悩みながらも活動を続けています。



わがセンター 会議参加センターの自己紹介

群馬

開局23年。175名が活動しています。2015年4月から、朝9時～夜中0時まで毎日受信。自殺傾向の相談電話が、統計では夜間に多くみられることで、**受信時間の延長を相談員の総意で決定**しました。毎日24時間受信体制への歩みへゆっくりですが努力を続けています。広報誌は年2回発行。広報誌の見直しが委員会で検討されています。減少傾向にある相談員募集のPR活動は、広報委員会のみならず組織を上げて、取り組んでいるところです。たゆまぬ努力と熱意をもって社会貢献する相談員の活動を、「相談員を目指そうとする人」に届く情報提供を模索しています。

福島

設立して18年経ちましたが、いま、人の18歳の頃のように迷い、悩んでいます。ネット社会の急速な広がりで多様なコミュニケーション手段が登場していますが、それに追いつくことが出来ません。「追いつかなくてもいいのかなあ」とも考えて、もがいています。郡山分室が出来て10年、分室で活動している相談員達とは年2回の全体研修で交流を図りながら、**いつの日か24時間電話相談実施**を目指して頑張っています。年2回発行の広報誌も、いつも読んでいただく方の対象をどこに置くかで悩んでいます。

浜松

静岡県内初の「いのちの電話」としてスタートしたことが、私たちの誇りです。そもそも浜松は“ものづくり”の街として発展してきました。ヤマハ、ホンダ、カワイなどたくさんの企業の発祥の地で、住民は「**やらまいか精神**」に溢れています。「やろうと思ったことはやる」というのが「やらまいか精神」です。私たちは来年開設30周年を迎えるに当たり「眠らぬダイヤル」を目指しています。そのための相談員の確保は簡単ではありませんが「やらまいか」と頑張ります。

栃木

私たちのセンターは宇都宮にあります。相談室は窓から日光連山を遠くに望めるビルの中にあり、相談員の癒しの環境になっています。開設35周年の節目を迎え、190人で相談に当たっていますが、数年前に24時間体制に移行してから男性が増え、**以前より活気が**感じられます。若者の情報伝達方法がスマホやメール主流になっているのを踏まえ、メール相談の検討を始めました。広報誌は一般市民を対象にした“たより”を年2回発行、内部向けに“むつみ”を毎月出しています。

山梨

多くのセンターがそうであるように、我がセンターも相談員の減少という波に苦しんでいます。もともと所帯が小さく人口密度や様々な条件が揃わない中を、15年前の開設時の勢いをもってここまで頑張ってきました。今年に相談時間を短縮することになり、そのことについて話し合った全体会では、相談員の意見の相違もありましたが、様々な現状を踏まえての苦渋の選択でした。更に多様化する相談者への対応や運営についての難題を抱えつつも、この電話を**必要とされる方のある限り**、設立の思いを繋いで頑張っていきたいと思えます。

埼玉

1991年に全国35番目の「いのちの電話」として開設されました。大宮センターと川越分室の2カ所を拠点に、約300人の相談員が活動しています。24時間365日受信しているダイヤルのほかに、18歳未満が対象の「**こどもライン**」と「インターネット相談」があります。

開設15周年の「こどもライン」は金・土曜の15時から21時半まで電話を受け付け、相談員として1年以上経験した人が担当しています。こどもライン研修を定期的に行い、いじめや虐待など子供特有の問題点や、かかってくる電話の特徴について話し合います。



千葉

開設 26 年。「電話相談」の他に「メール相談」「個別相談」「自死遺族支援」と、**4つの相談事業**を行っています。相談員が減少しているのに、そんなに手を広げていいのか、という意見も出ていますが、皆の頑張りで 24 時間体制を維持しながらこなしています。広報誌は年 2 回発行しています。いま、スタッフは 4 人ですが、関係者へのインタビュー、表紙の写真さがし、広告出稿のお願いなどで大変です。もう少し広報に携わる人が増えるといいのですが、より多くの方に「いのちの電話」の存在を知ってもらわなくては、と頑張っています。

盛岡

後援会組織があり、その活動が運営資金を確保する上で大きな力になっています。開設 25 年を迎えましたが、県の補助金や個人、法人からの寄付金などで、どうにか赤字を出さずに運営出来ています。**相談員に高齢化の波**が押し寄せています。「耳が遠くなり、電話の声が聞き取り難くなってきた」「家族の介護をしなければならぬ」「体調が思わしくない」などで、退会や休務が増えています。そんな中、いま実習中の相談員 25 期生がいつもより増えたのが朗報です。相談電話の受信率を上げることが出来るのでは……と期待しています。

横浜

今年 35 周年を迎えるわがセンターの特徴は、スペイン語とポルトガル語による**“外国語相談”**です。南米から受け入れた日系外国人労働者からの相談に対応するため開設されましたが、日本語の相談室とは別で、お互いの交流はありません。いま、日本語の相談員の最大関心事はセンターの移転問題です。立ち退きを迫られていますが、まだ移転先のメドがたっていません。相談員と資金支援者の減少への対応を含め、状況打開するための組織としての方向付けが出来ていないことが問題です。ボランティアのやり甲斐を生み出す、新しい活動のイメージが求められていると思います。



山形

発足から 25 年目を迎えた山形センターの現状は、相談員の高齢化と慢性的な相談員数の不足に悩んでおります。24 時間体制を目標にしておりますが、現在は 2 台の電話で午後 1 時～ 10 時までの受信です。

関係機関に働き掛けての啓発活動や、相談員の交流を深めるための一泊研修を開催するなどして、解決のための歩みを進めています。「**仲間とともに出来ることからコツコツと**」の気持ちを皆と共有すれば、必ず良い方向へ転じ、目標に向けての活動に近づけると信じて……

東京

“眠らぬダイヤル”という伝統的なキャッチコピーが使えなくなりそうな気配です。行政を含めて同種の相談窓口が多くなり、ボランティア活動の場が増え「いのちの電話」の相談員の確保が難しくなっているからです。東京センターが始まって 40 年以上たち、理念は不変でも組織運営は変わっていかねばならない時期に来たように思えます。社会のありようが大きく変わる中で、私たちはどのような存在になればいいのか悩みます。「いのちの電話」を**大切な社会資源**と意識し、他の活動組織とも問題を共有していく時代が来たと感じています。

「東日本広報担当者会議を終えて」

～寄り添う事の尊さを噛みしめて～

台風の影響が心配された中、無事に会議が開催されました。遠路遙々お集まり頂きました皆様に深く御礼申し上げます。

吉田講師の講演、またセンター同士が活発に交流し、笑顔で意見交換した中から、それぞれのセンターが今後の広報制作に繋がる沢山の「お土産」を持ち帰る事が出来たのではないかと、思います。

各センターの特色を聞かせて頂きましたが、開局から35年たった「北海道いのちの電話」は相談員全員が参加するグループ学習会を、月に一度行っています。そこではロールプレイなど電話相談の資質向上の為の学習に加え、それぞれが1ヶ月の間に感じた事、思った事を気兼ねなく話し合い、グループメンバーが全員で「寄り添う」時間になっています。

志を共にする仲間と支え合いながら、ただひたすらに「自殺予防を願って」24時間365日の電話相談活動を続けています。いつも心と心の絆の尊さを噛みしめながら活動しています。一人でも多くの方に「寄り添う事の尊さ」を伝える事が出来たら、と今日も電話ブースに座っています。

「ひとりで悩まず話してみませんか」あなたの電話をお待ちしています。

北海道いのちの電話 広報委員会

今号の
一枚



写真・文：K.Y

「裏を見せ、表を見せて散る紅葉」（良寛）

辛い時、悲しい時、寂しい時、泣きたい時。「自分の裏」は見せたくないものです。しかし、「裏」も「表」も、全て自分です。ヒラヒラ散っていく紅葉には裏も表もありません。裏とか表とかこだわらない、ありのままの素直な自分である事が出来たらいいですね。

社会福祉法人 北海道いのちの電話（開局1979年1月）
事務局 〒060-8693 札幌中央郵便局私書箱107
TEL 011-251-6464 FAX 011-221-9095
URL <http://www.inochi-tel.com/>



発行人 南 慎子
編集人 広報委員会